



東京にて（撮影：言美 歩）

未曾有の事態を前に 職人作家の更なる「覚悟」

ゆるゆると長く横揺れする不気味な大地震、圧倒的な津波のエネルギー、そして、目に見えないがゆえに不安を煽る原発事故。日本を、日本人を三重苦が襲っている。

佐伯通信

2011年6月（平成23）
第4号
発行 佐伯泰英事務所
担当／祥伝社
禁・無断転載

あの日以来、日々なにをなすべきか迷っている。言葉なんて儚いものかと思う。小説なんて千年に一度の災害を前になんの役にも立たないと無力感に苛まれる。

被災地に老眼鏡が不足しているという話は、回りのペットの救護センターのためにプレハブ小屋が要ると聞けばなにがしかの義捐金を託す。だが、起こったことに比してなんとささやかな行為かとまた脱力感に襲われる。

佐伯泰英／近刊のお知らせ

8月	7月	6月
30日発売予定	4日発売予定	28日発売予定
『旧主再会』 〔新潮文庫〕 古着屋総兵衛影始末〔決定版〕11『帰還』	『酔いどれ小籐次留書』 〔幻冬舎時代小説文庫〕 古着屋総兵衛影始末〔決定版〕10『交趾』	『居眠り磐音 江戸双紙』 〔双葉文庫〕 古着屋総兵衛影始末〔決定版〕9『難破』

★佐伯泰英事務所作成のホームページができました。
<http://www.saeki-bunko.jp> 佐伯泰英 通信 検索

この「佐伯通信」は、佐伯泰英事務所が下記出版社の協力のもと年七回発行いたします。
（株）祥伝社、（株）幻冬舎、（株）新潮社、（株）角川春樹事務所、（株）双葉社、（株）光文社、（株）講談社

ついに開催！ 上覧剣術大試合

「密命」シリーズ最新刊『覇者』において、いよいよ開催される上覧剣術大試合。天下第一の武芸者を決める大会とあって、全国の有名無名の剣術家はもちろん、江戸の町も大いに沸き立っている。

そして、我々が金杉惣三郎・清之助父子にとりては、巻之七『初陣』での前回大会とともに、重大なターニングポイントとなったイベントでもある。そもそもこの剣術大試合は、徳川吉宗が武術の

奨励策として命じたもので、享保六年に老中・水野忠之の主宰で開催された。その五年後となる享保十一年、吉宗自らが主宰となり、規模が拡大されたのが今回の大試合だ。まず、試合会場は昌平坂学問所内の剣術道場となり、大試合のために大規模な改修が行われた。試合形式も、基本的に木剣での一本勝負と定められていた前回とは全く異なる状況でどのような試合を繰り広げるのか？

一方、前回は審判を務めた父・惣三郎が、今回の大試合で果たさんとしている目的とは……。

果たして大試合の結末は!?
『覇者』 密命・上覧剣術大試合（巻之二十五）

前回大会の詳細はこちらを
『初陣』 密命・霜夜炎返し（巻之七）



世間では自粛しろとい、そのうち、自粛では復興の助けにならないから祭りもやれ、旅行も行け、酒場に足を運んで酒を飲めという。

朝晩の老犬の散歩の際に、熱海を訪れる観光客の数をチェックする。貫一お宮の銅像を前に写真を撮っている人がいれば、「これも復興の第一歩か」と安心し、駐車場に車が見えないと、「やっぱりダメか」と肩を落す。新聞もテレビも見たくない。あの日から

三週間も過ぎるとテレビがバラエティと称するお笑い番組にすり替わった。無節操というかわり身が早いというか。

私の前立腺ガンなどどこかに消えた。これが私にとって唯一あの日が生じさせたプラス面か。

この現実には戸惑いながらも立ち向かう人々がいることに思いを致せば、結局は己の分をまもって時代小説を書いていくしかない。日々の務めを果たしながら遠くから震災後の変化を見

守り続けていくしかないかと考え直す。それでも気が晴れないことに変わりはない。

『密命』は私が初めて手掛けた時代小説シリーズだ。それが今月の『覇者 密命・上覧剣術大試合』（祥伝社刊）で山場に差し掛かった。ぜひ読んで下さい。

「佐伯通信」第5号は、8月4日発売予定の『酔いどれ小籐次留書』旧主再会（幻冬舎時代小説文庫）に入ります。